

くらしと協同をたずねてー海外編

03

協同の元祖を訪ねて

ーイギリスの歴史をたどる

浮網 佳苗（京都大学 非常勤講師）



童話『ピーターラビット』の一場面

はじめに

協同組合とイギリスは非常に関係が深い。協同組合の父といわれるロバート・オーウェンや、近代で最初に成功した協同組合であるロッチデール公正先駆者組合に代表されるように、協同組合が世界で最初に普及した地であるからだ。さらに、協同組合にそれほど関心のない人々にとってもイギリスは遠い存在ではないだろう。田園風景、紅茶、サッカー、『ピーター・ラビット』や『ハリー・ポッター』などのファンタジー、どんよりした天気、スキャンダルにまみれた王室、おいしくない食事などのイメージは日本の多くの人が知るところである。ー外国について、これだけ多くのイメージが共有されているのも珍しいのではないかと感じる。思えば、夏目漱石の留学先はロンドンであったし、皇室一族の留学先も決まってイギリスである。学問にせよ、音楽にせよ、スポーツにせよ、何らかの分野で学ぼうとする日本人の多くがイギリスとの関わりで修行しようとする。それは、ひとえに、イギリスが政治、経済、文化などあらゆる面で世界をリードしてきたという歴史があるからだろう。産業革命による資本主義社会の確立、今日の民主主義の基本である議会制の導入、ラグビー、ゴルフ、テニスといったスポーツなど挙げればきりが無い。いいかえれば、それだけ現在の私たちの生活に計り知れない影響を及ぼしているということでもある。

本稿では、筆者が普段取り組んでいる歴史研究の視点から、イギリス社会の特徴や文化を紹介したい。さまざまな分野で世界の一番乗りを達成してきたイギリスという国について知ることは、グローバリズムや環境問題、新型コロナウイルスの感染拡大など多くの課題を前に私たちの日常を守るためにいかに行動すればよいのかという問いに対して、有効な指針ないしヒントを与えてくれるであろう。

イギリス社会の伝統

そもそも、なぜイギリスで協同組合が急速に普及したのであろうか。その答えを紐解くにはロッチデール先駆者組合（1844年～）が創設されて以降のイギリス社会をふりかえる必要がある。そこで、ここでは、19世紀後半のイギリス社会を概観したい。

19世紀のイギリスといえば、やはり産業革命に触れないわけにはいかない。農業と手工業が中心の社会から機械による大量生産が可能な社会に移行し、現在の経済体制の原型が形成された歴史上の画期的出来事だからだ。では、産業革命は社会をどのように変えたのだろうか。

前近代、つまり産業革命前のヨーロッパ社会は基本的に身分制社会である。ほとんどの人は生まれながらに農民であり、物質的には貧しく、限られた資源や富のなかで、贅沢どころか質素に暮らしていた。

ところが、産業革命は、富の総量が限られた貧しい社会から、富が飛躍的に無限に増大する経済のしくみを生み出したのである。蒸気機関という人類初の人工エネルギーが発明されたことで、機械化が促進され、短時間で大量に生産することが可能になり、市場にはモノがあふれた。こうした変化は、人々の消費欲求を刺激し、大量消費を実現した。この大量生産・大量消費というサイクルは、経済成長を促し、国全体を豊かにした。

しかし、経済成長は同時に多くの問題を露呈した。産業革命によって、前近代の身分に代わり、イギリスでは新たに階級が大きな意味をもつようになる。前近代の特権身分を引き継いだ貴族や地主などの上流階級、産業化のなかで会社経営に成功し富を築いた中産階級（資本家）、自らは富を築く手段をもたず雇われによって生活する労働者階級である。

このなかで、イギリス人の大半を占めた労働者の生活は決して楽ではなかった。当時も会社の第一の目的は利潤追求であり、工場での生産には効率性が最大限求められた。その結果、労働者の賃金は低く抑えられ、職場の衛生状態も悪く、労働時間は1日10時間以上に及んだ。また、工場は24時間稼働しており、都市部を中心に大気汚染が深刻になった。こうして、労働者の貧困や長時間労働、自然破壊や環境汚染は19世紀後半以降大きな社会問題となっていく。



貧民収容施設の食事風景（19世紀末）

産業革命によって生じたさまざまな問題に対処することが急務となっていくが、イギリスではその中心となったのが、政府でも企業でもなく、民間の非営利組織であった。つまり、19世紀後半のイギリスでは社会を改善するための民間の自発的な活動が非常にさかんだったのである。

国民の生活を守るのは、政府でも企業でもなく、国民自身であるという考え方は、労働者の間でも広まり、さまざまな相互扶助組織の結成を促した。そのなかでも、協同組合、とくに生協が労働者の日常に不可欠の存在として大きな役割を果たした。

今でこそ当たり前に見える生活を支える助け合いの知恵は、いちはやく産業革命を

経験したイギリスだからこそ生まれたといえる。フランスやドイツなど国家の力が絶大な諸外国に比べて、民間の力の大きさが19世紀イギリス社会の特徴であった。

そして、この特徴は現在にも引き継がれている。例えば、イギリスではチャリティ活動が19世紀以来非常に活発である。欧米では寄付文化が根付いていることはよく知られるが、イギリスでの広がり、もはや熱狂的ともいえるほどである。チャリティ組織やその他ボランティア組織を含む非営利組織の数は150万を越える（2001年）。日本でのNPO法人数は5万3,000ほど（2017年）であるから、その数の多さは一目瞭然である。筆者がロンドンの大学を訪問した際、ボランティア組織が学生に対し、定期的に無料の昼食提供を行っているのを目にしたことがある。日本ではあまり見ない光景だが、イギリスでは19世紀以来、生活が苦しい人々に対する無償の食事提供は日常的に広範に行われてきた。イギリスにおける協同組合やチャリティなどの市民による自発的な活動はこうした長い伝統のうえにあり、互いに協力して助け合うという協同の精神が文化として浸透しているのである。



イングランド北部の生協衣服工場（19世紀末）

イギリスを訪ねる

筆者は過去におけるイギリスの生協の実態を明らかにすることに取り組んでいる。その際、当時の新聞や雑誌、公的刊行物、著作、日記、手紙など、その時代を生きた人々によって書かれた史料を用いるが、これらの史料は当然イギリスに所蔵されている。とりわけ、生協が最初に活発になったマンチェスターには膨大な数の史料がある。

マンチェスターは、19世紀以来、協同組合運動の中心地となってきた。ロッチデール先駆者組合が誕生した地域もマンチェスターに近く、これらのイングランド北部一帯を起点として19世紀の生協が拡大していったのである。現在の市中心部には生協店舗や協同組合銀行、コープ共済、生協連合会本部などのビル群がそびえる。その一角に協同組合関連の膨大な文書を所蔵する図書館がある。今まで何度か訪問したが、スタッフはいつも気さくで、筆者の無知な質問にも丁寧に答えてくれ、和やかな雰囲気である。

ちなみに、現在のロッチデール地域は住宅地となっているが、先駆者組合の店舗は博物館として公開されており、誰でも無料で訪れることができる。



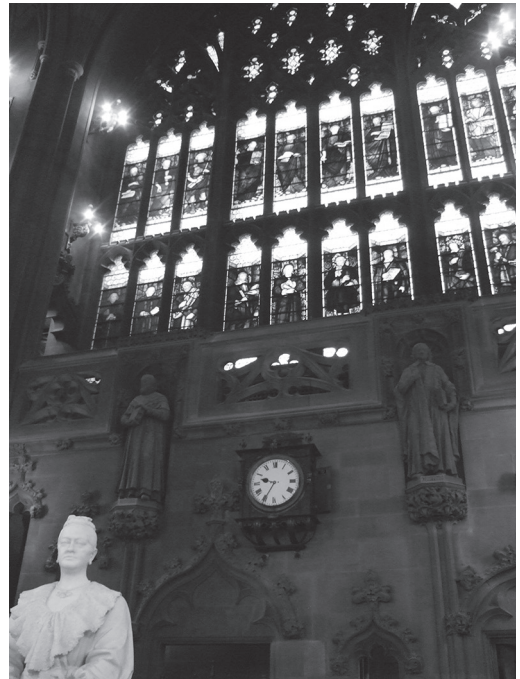
図書館入口

マンチェスターは、産業革命のなかで栄えた都市であると同時に現在ではロンドンに次ぐ大都市で、企業や大学などの教育機関が集まる活気に満ちた場所である。また、近年ではアフリカや中東、インドなどからの移民が増加し、多様な文化が混在する。

市内には産業革命当時の様子を感じることのできる建物が随所に存在する。例えば、協同組合関連のビル群から南へ行くと、科学産業博物館がある。この博物館は、マンチェスターとリバプール間に敷設された世界初の旅客鉄道の駅舎を利用して作られた。館内では鉄道や水力、ガス、電気などに関する展示を楽しめる。その内容は世界屈指の充実ぶりだとされるが、とりわけ当時使用されていた線路上を蒸気機関車が走る様子は一見の価値がある。

さらに、マンチェスターには、ゴシック様式（尖塔アーチが特徴の中世の教会建築様式）の建物が多く残っている。産業革命期、国内各地で中世風の建物が作られたが、これは科学が進歩しても古いものを大事にするイギリス人の気質の表れであった。とくに、市内のゴシック建築物のなかでも人々を魅了しているのが、マンチェスター大学のジョン・ライランズ図書館である。内部は図書館とは思えないほどの荘厳な作りで、ハリー・ポッターの小説の舞台にでもなりそうな雰囲気は圧巻である。誰でも無料で入場できるところもうれしい。

このように、マンチェスターは19世紀イギリスを体感できる魅力にあふれた街である。その他にも本稿には書ききれないくらい多くの興味深い場所があるので、イギリスを訪れた際には、ぜひマンチェスターに足を運んでいただきたい。



教会のようなジョン・ライランズ図書館内部

イギリス食文化の不思議

イギリス文化といえば、ポジティブな側面だけでなく、ネガティブな側面にも興味深い歴史的背景が隠されている。その代表的事例が、イギリス料理は「まずい」というものである。この不名誉な烙印はあまりにも有名だが、なぜそう認識されるようになったのであろうか。従来から、食に興味のない国民性や宗教的要因などさまざまなことがいわれてきたが、ここでは、より経済的な背景を考えてみたい。そのためにまず、産業革命期のイギリスにおける食の状況を概観する。

実は、19世紀前半の数十年間にイギリスの食文化は著しく衰退している。食材の多様性が低下し、土地固有の食材が消滅し、食の中心が大量生産可能な農業牧畜産品や大量捕獲漁法による魚類、工業製品で占められるようになった。また、古くから用い

られてきた生姜やサフラン、シナモン、ナツメグ、甘草といった熱帯産の香辛料の使用も低下した。唯一、カレー粉だけは、インド支配の影響で急増しているが、基本的に香りや味の点で華やかさを欠いた、薄い塩味のイギリス料理となっていく。さらに、調理法も単調化し、塩茹で、オーブン過熱、油で焼く（揚げる）の3通りしかなく、蒸す、直火で炙る、遠火で熱するなど、かつて行われていたさまざまな調理法が消えてしまったのである。その結果、ほとんどの料理が最低限の塩と胡椒だけを用いて作られ、食べる者が食卓で、塩やグレービー（肉汁に小麦粉、ワインなどを入れて煮詰めたソース）、酢、ケチャップなどで味付けするという何とも寂しい状況ができあがってしまった。

産業化のなかで、皮肉にも食文化が乏しくなってしまったわけだが、それ以前のイギリスでは中世以来、食材の種類は豊富で、さまざまな調理法が存在し、実に豊かな食の伝統があった。

では、なぜこれほどまでに多彩な食文化が衰退に向かってしまったのであろうか。食文化の衰退後、イギリスから豪華でおいしい料理が全くなくなってしまったかという点、そういうわけではない。金銭的余裕さえあれば、おいしい料理にはありつけたのである。富裕層は、宮殿や邸宅、レストランにおいて、おもにフランスなどからの外国の料理人による趣向を凝らした料理を楽しんでいた。

問題は贅沢のできない庶民の食事である。産業革命のなかで、農業の生産性向上がはかられ、今まで共有だった土地が、次々と大地主の私有地となり、大規模農場経営が行われるようになった結果、農村が消滅し、小規模農家の菜園は荒廃してしまった。実はこの共有地や菜園こそ、その土地固有

の食材の宝庫であり、農民はそれらを自由に採取していたから、私有地化による共有地や農村の消失は、彼らが多彩な食材を入手することを不可能にした。

当然、都会の金銭的余裕のない労働者階級の人々も、旬の多彩な食材を入手することはできなかったから、身体に害のある危険な添加物が入った食品や腐りかけの肉、野菜、乳製品を安く買うしかなかったのである。市場に蔓延する劣悪な質の食品が労働者の健康状態に及ぼす影響は、社会的議論を呼んだ。そのなかで、初めて具体的かつ大きな取り組みとして食の安全安心に寄与したのは、他でもなく生協である。生協による、質が高く、なおかつ労働者でも購入可能な価格の食品の販売は、その後20世紀に入り、生協の拡大に伴って企業にも影響を与えた。その結果、市場で販売される食品の質が全体的に向上していったのである。

このように、食文化の衰退は19世紀からはじめていたイギリスの特徴であり、「まずい」という感覚は歴史的にみても間違っていないかったことになる。現代のイギリスにおいても、イギリス料理は種類が少なく、食材の多様性に乏しく、複雑さや繊細さに欠ける味であることに変わりはないかもしれない。多くの家庭では、朝はシリアルにトースト、昼はサンドイッチが定番である。スーパーに行けば、驚くほどの種類の冷凍食品が並んでいる。

と、ここまでイギリスの食の乏しさを述べてしまうと、イギリスに行っても食は楽しめないのではないと思われるかもしれない。しかし、そんなことはないので安心していただきたい。高級レストランに行かずとも、「まずくない」イギリスの食を楽しむことができる。

まず、味が薄く、単純な調理しかされて

いないといわれるが、良くいえばそれは素材の味を活かし、素材そのもので勝負したごまかしの効かない料理なのである。あくまで筆者の感覚ではあるが、野菜や果物の鮮度は高い。どこのスーパーに行っても有機農産物が手頃な価格で売られているのも印象的である。

また、イギリス料理といえば、フィッシュアンドチップスがあまりにも有名だが、これは19世紀以来、安くて栄養価の高い伝統料理として労働者を中心に好まれてきた。現在において、イギリスの伝統的な庶民の味を楽しめる場といえば、やはりパブである。パブは大衆居酒屋で、かつては労働者が集い酒を楽しみ、貴重な社交場として機能した。伝統料理を手頃な価格で堪能したければ、パブに行くのがよいだろう。ローストビーフをはじめ、ミートパイ、鴨肉のロースト、魚の燻製など、庶民が慣れ親しんだ味が提供される。



マンチェスターの老舗パブのビーフ料理

さらに、最近では、「モダン・ブリティッシュ」と呼ばれる、新たなイギリス料理が出現している。1950年代以降、スペイン、ポルトガル、ギリシャなどに出かけるようになった若い世代の労働者による地中海風の新たなイギリス料理が創作されるようになってきた。こうした動きもイギリスの食の新たな可能性を示すものである。

食文化の背後にある歴史や人々の考え、協同組合の役割などを考えながら、イギリス料理を食べてみると、「まずい」とはいえない、また違った新たな楽しみ方ができるのではないだろうか。

おわりに

イギリスはかつて「世界の工場」と呼ばれ、世界各地に植民地を有し、さまざまな地域間の人やモノの往来があった。また、国内では、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北部アイルランドの各地域が連合して国家を構成している。いいかえれば、イギリスはさまざまな思想や立場が混在し、多様性を内包する国であった。資本主義の国イギリスで、社会主義経済学者であるマルクスが弾圧を受けることなく自由に勉学に励むことができたのも、このことを物語っている。そして、自由と多様性が認められていたからこそ、民間による非営利の活動が広がり、協同組合の思想と実践が育まれてきたといえる。

悲しいことに、現在の世界では自国優先主義と国家間対立が高まりつつある。しかし、ウイルスや地球環境の問題に取り組むうえで重要なことは、対立ではなく、助け合いであり国際協調や連携である。イギリスが培ってきた協同の伝統は、困難に直面する現在の私たちに何が大事なのかを教えてくれる。

(主要参考文献)

- 井野瀬久美恵編『イギリス文化史』昭和堂、2010年。
- 小野塚知二『経済史——いまを知り、未来を生きるために』有斐閣、2018年。
- 中川雄一郎『協同組合のコモン・センス——歴史と理念とアイデンティティ』日本経済評論社、2018年。